

部 長 滝 俊明
研究主任 舟橋 菜津美
部 員 数 4 4 名

1 研究主題

興味を持って、説明文を読み解く力の育成
～教師も子どもも分かりやすい授業を目指して～

2 はじめに

近年、論理的思考力や問題解決能力の重要性が話題になっている。国語教育において主にそのような能力の育成を担っているのは、説明文の授業であると考えられる。

昨年度は、教師も子どもも説明文教材に楽しく取り組みながら読み解く力の育成することを目指して研究してきたが、今年度は次の段階として、「興味を持って、説明文を読み解く力の育成～教師も子どもも分かりやすい授業を目指して～」という研究主題を設定し、内容把握や文章構成を理解させるために分かりやすく学習させる方法を探求してきた。

3 研究経過

- (1) 毎月、学年ごとに分かれて授業の教材研究や実践報告をした。
- (2) 昨年度からの取り組みについて、愛日支部国語部会研究集会で発表した。
- (3) 報告会を行い、次年度のテーマについて話し合った。

4 研究の概要

5 月	各学年に分かれて、教材研究および質疑応答
6 月	各学年に分かれて、教材研究・実践報告および質疑応答
9 月	発表会リハーサル、検討会
10 月	愛日支部国語部会研究集会発表
11 月	発表報告会、各学年に分かれて教材研究・実践報告

月ごとの研究テーマは上の表の通りである。毎月学年ごとに教材研究を行い、それを生かした授業実践の報告をした。資料を持ち寄り、熱心に話し合う様子が見られた。話し合ったことをグループごとにまとめ、それらを集約した文面を次の研究会で配付することで、すべての先生が他学年の行った教材研究や実践報告を知ることができた。

9 月の研究会では、愛日支部国語部会研究集会に向けて発表のリハーサルを行い、改善点などについて話し合った。

10 月の発表会では、3 つの分科会に分かれて実践報告を聴き、学んだ。発表者は、小牧市の取り組みについて分かりやすく伝えた。

11 月は、それぞれの分科会でまとめについて報告会を行った。発表会

で学んだことや毎月の実践報告を基に、3学期の説明文の授業を考え、さらに研究を進めていく予定である。

① 小学校1・2年生部会の報告

児童にとって、ペア読みは効果的である。音読を多く取り入れ、本文に基づいて考えることで正しく理解できた。実物や写真を見せたり挿絵と見比べたりすることで教材に興味を持たせることができた。難しい言葉は分かりやすい言葉に置き換えて考えさせた。文字を追うことで精一杯で、内容理解に至らない児童がいることやペア児童とコミュニケーションがとれない児童への支援などが課題として残った。

② 3・4年生部会の報告

段落ごとに分けた文章をパズルのように並び替えさせ、なぜそうなるかを考えさせる際、「はじめ・中・終わり」を意識させた。「事実」「筆者の考え」と分けて内容を捉えさせた。まとめる活動において、自分の経験や考えを十分に表現できない児童への支援が課題となった。

③ 5年生部会の報告

本文の内容をしっかりと捉えさせるために常に音読を取り入れた。小単元で要旨をつかませってから、形式段落ごとの中心文を押さえたので、取り組みやすかった。グループ隊形にしていつでも尋ねられるようにしておけば、低学力の児童でも取り組むことができた。しかし、字数指定の要旨のまとめでは、言葉の取捨選択に悩んでいた。読み取る力から書く力につなげることが課題となった。

④ 中学校1年生部会の報告

文章と図を照らし合わせて読ませたり、表に書かれていることを説明させたりする学習に取り組んだ。書く学習では、レベル別にしてA4サイズ1枚と分量を指定したら、1時間で取り組むことができた。どんな方法であっても、楽しみながら力をつけていくという課題に向かい、教師がしっかりと教材研究をしていく必要性を感じた。

⑤ 中学校2・3年生部会の報告

本文が長いため、段落パズルは難しい。ワークシートを作り、まとめさせるとキーワードを捉えやすかった。仲間の様々な考え方に触れて、自身との相違点がどこで生まれているのかを深く考えることができたこと、理論展開の工夫に自分たちの力で気づいたことが成果として挙げられる。一方で、主体的学習を通して、個人の理論的思考をより一層深めていくことが課題である。

⑥ 国際部会の報告

写真や動画を見せることで、視覚を頼りに情報が整理させた後、本文に戻すと理解させることができた。低学年は、語彙カードを使って語彙を増やす活動を行っている。児童・生徒一人一人の能力に応じて、新しい言葉を覚えていけるような教材文に書き換える必要がある。

5 今後の課題

小・中の教師が集まり、連携して研究を行える機会は少ない。それぞれの学年の発達段階に応じた指導方法を学び、9年間のつながりを考えて授業実践していくために、今後も教材研究や実践報告を重ねていきたい。